〈青森県史〉の窓 81

宝が湧き出た村

蔦谷大輔
（県民生活文化課県史編さんグループ非常勤嘱託員）

昨今の石油価格の高騰は、私たちの生活に大きな打撃を与えている。この主な原因は、日本の原油輸入量の大半を占める中東地域の政治・社会情勢の影響である。輸入に頼ってきたツケがまわってきたわけだが、そうした中、石油開発会社などは、国内油田の開発に目を向けようとしている。実は、わずかながら国内にも産油地はあるのである。

平川市町居山下にある熊野宮（2012年4月15日・筆者撮影）
この麓には、東北自動車道を挟んでリンゴ園がある。

全国的に産油地として知られるのは、新潟県や秋田県の日本海沿岸部である。現在では、新潟県胎内市の阿賀沖油田など海底油田の開発が進んでいるものの、とりわけ明治期以前は、湿地帯から石油が湧き出ていたといわれる。石油と称される以前は、石脳油とか臭水などと称されており、『日本書紀』には、越州（現北陸地方）で産出した燃える土と水が天智天皇に献上されたという記述もある。江戸時代には、越後国（現新潟県）の各地で石油が湧き出たほか、信濃国（現長野県）・越前国（現福井県）や佐渡国（現新潟県佐渡市）でも発見されたという。

さて、話を青森県内に絞ろう。江戸時代、弘前藩内で前述の越後国のように石油で話題となった地域がある。それは町居村（現平川市町居）である。村の東南端に山があり、その麓の沢から、湧水に混じって石油が湧き出ていたという。その臭いは腐った肉のようで、煤を使って墨を作れば、松の枝などの煤で作った松煙墨より質のよいものができたという。また、石油の湧く所は作物が育たず、生物もすべて死んでしまうことから、田畑に虫が付く時期には除虫剤としても役立つものであった。

この町居村の石油は藩内の人々に注目され、商品として売買したいので採集させてほしいと藩に願い出る者もあらわれた。しかし、その多くは弘前城下の町人などであり、町居村の人々は石油を売買することはおろか、取り出すことすらしなかった。そのわけは、村人たちは、この油を取れば神の祟りに遭い、農耕の障害となると信じていたからである。村の人々は、石油を取り出そうとした人に対し、様々な工作により妨害したようだ。そこで、藩は山に祠を建立して、五穀成就などの祈祷を行い、村人の祟りへの不安を解消させたという。この時に建立されたのが、蔵王権現（現熊野宮）といわれる。

このように、藩の一大産業にまでは発展しなかったものの、宝の池として町居村の石油は重宝され続けた。太平洋戦争前に、石油会社が熊野宮付近を試掘したところ、石油を含む地層が発見された。しかし、開戦直後に開発が中止となり、戦後再びボーリング調査をしても新たな石油鉱脈は発見されなかったという（『平賀町誌』上巻）。現在はリンゴ園となっているこの地から今も石油が湧き出ていたら、一体どのような光景が見られただろうか。